

解説

高原 光¹: 京都市片波川源流域におけるスギ巨木群からなる天然林
 Hikaru Takahara¹: An old growth forest consisting of giant Japanese cedar
 (*Cryptomeria japonica*) trees in the headwaters area of the Katanamigawa River, Kyoto City

日本列島における現植生図では、西日本から関東は暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)、東北以北は冷温帯落葉広葉樹林として位置付けられているが、スギなどの温帯性針葉樹の植生帯上の位置づけは明確でない。第四紀の気候変動のなかで、スギは寒冷な氷期にも温暖な間氷期にも長期間に渡って優勢な植生を形成していた。特に、近畿地方北部の若狭湾沿岸から琵琶湖北部にかけての地域は、最終氷期最盛期におけるスギの逃避地と認められており、完新世にいち早く、スギが分布を拡げた地域である(Tsukada, 1982; Takahara et al., 2022)。その後、人間活動が活発になるまでは、日本海側地域では、低標高地から山地までスギの優勢な植生が存在していた(Takahara et al., 2022)。このような植生史の研究成果に基づくと、特に暖温帯から冷温帯にかけての本州の日本海側地域において、スギは重要な位置を占めていることは明らかである。

約1000年前まで広く分布していたスギ天然林は人間活動によってその多くが失われているが、東北地方から屋久島まで各地にスギの優勢な天然林が残されている。本稿では、最終氷期最盛期のスギの逃避地に近い京都市片波川源流域におけるスギの巨木が分布する天然林について紹介する。

この源流域では、標高470から860 mの106.63 haが京都府自然環境保全地域に指定されている(京都府, 1999)。この天然林には、尾根に多数のスギ巨木が分布し、ヒノキ、モミ、ツガなどの針葉樹や、イヌブナ、クリ、ミズナラ、テツカエデなどの落葉広葉樹が混生している。また、尾根の岩石地にはヒメコマツやホンシャクナゲの密度が高い植生の分布も認められている(京都府, 1999)。

これらのスギの胸高直径は大きいもので4 mを超え、それらの多くは伏条台杉と呼ばれ特異な樹形をしている。伏条台杉は、かつて、地面から数メートルの

高さで伐採され、そこから多数の太い萌芽枝が幹となって伸長しているスギである(写真1)。また、地面から2 m程度の位置で斜めに斧によると思われる伐り目が入れられ、縦に板状に材を取った跡が残る個体が多数認められる(写真2)。このように、天然林ではあるが、スギの幹の一部を取るという森林と人間活動の関係史を刻んだ痕跡が残っている。これらの伐採や板取りが、いつどのように行われたかについての科学的な調査は未だ行われていない。一部には、台風による倒木も見られ、早急にこのような痕跡の残る個体の調査や保全が望まれる。

引用文献

- 京都府. 1999. 片波川源流域京都府自然環境保全地域指定書及び保全計画書, 12 pp. 京都府, 京都.
- Takahara, H., Ikeda, S., Sasaki, N. & Hayashi, R. 2022. Vegetation history of *Cryptomeria japonica* in Japan since the last interglacial period. *Ecological Research* doi: 10.1111/1440-1703.12357
- Tsukada, M. 1982. *Cryptomeria japonica*: Glacial refugia and late-glacial and postglacial migration. *Ecology* 63: 1091–1105.
- (¹ 〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5 京都府立大学大学院生命環境科学研究科
 Graduate School of Life and Environmental Sciences, Kyoto Prefectural University, Kyoto 606-8522, Japan)



写真1 スギ巨木の樹形。



写真2 板取りされたスギ。